

報告 1
第一次世界大戦の共同研究
— その比較史的課題 —

藤原 辰史

(京都大学人文科学研究所)



○宇山智彦 今日は3人の報告者と1人のコメンテーターの方においでいただいています。1人目の報告者は京都大学人文科学研究所の藤原辰史先生です。

藤原先生は、お生まれは旭川だと伺っておりますが、京都大学およびその大学院で学ばれ、京都大学助手、東京大学講師を経て現在人文科学研究所にお勤めです。お若いですが多数の著書をお持ちで、『稲の大東亜共栄圏：帝国日本の〈緑の革命〉』（吉川弘文館、2012年）ですとか、最近、河合隼雄学芸賞を取られた『ナチスのキッチン：「食べること」の環境史』（水声社、2012年）という本もありまして、ナチス時代のドイツや帝国時代の日本の農業、食糧の問題について、大変刺激的で幅広い研究をなさっています。人文科学研究所では、フロアにいらっしゃいます、所長で著名な歴史家である山室信一先生がリーダーとなって、第一次世界大戦の共同研究をしておられます。今日は藤原先生のご自身の研究ももちろん含みながら、「第一次世界大戦の共同研究 その比較史的課題」という題でお話をいただきます。それぞれの報告は大体25分、最大でも30分ということをお願いしたいと思います。

○藤原辰史（京都大学人文科学研究所准教授） ただ今紹介にあずかりました藤原と申します。よろしく申し上げます。宇山先生からお話がありましたように、今日は京都大学人文科学研究所で進めております、第一次世界大戦をテーマにした共同研究³のお話をさせていただきます。

第一次世界大戦がどうして共同研究のテーマたり得るのかということに関しては、また後ほどお話ししますが、いろいろな国を扱っているということのみならず、いろいろなテーマが次々に出てきて、とても大変な状況になっています。だからいろいろな関心を持っている人がどんどん集まってくるという、これはまさに共同研究の楽しさというか、いろいろな方と出会えるという意味でもすごく楽しい研究です。

今日はその研究班の紹介もしくはPRを先にさせていただいて、研究班がどういったテーマで、どういったアングルから、この第一次世界大戦というものを捉えているかというお話をし、もし最後に時間が余ってしまいたら、私のテーマである食糧とか農業の観点から大戦を比較し、研究をしたらどのようなことになるかという、仮説のようなものを皆様にお話しできればと思っております。

さて、この研究班ですが、山室信一さん、それから岡田暁生さんという、お2人のダブル班長制で2007年4月から始めております。もちろん目標は来年、2014年で、そんなにことほぐべきことではないですが、第一次世界大戦が開戦してちょうど100周年に当たります。ヨーロッパではほぼ毎週のようにシンポジウムが開かれることになるという中で、我々は少し早めにこの研究班を始めまして、すでにいろいろ中間報告をしていますけれども、その2014年を目指して研究を進めてまいりました。私もスタート地点から世話人の1

³ 京都大学人文科学研究所共同研究「第一次世界大戦の総合的研究」
<<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~ww1/>>

人としてお手伝いをさせていただいておりますので、簡単にご説明をしたいと思います。

まず、この研究班のマニフェストですが、研究班のホームページに書かれてありますけれども、4つに大きく分けてあります。1つは、大戦が20世紀の起点であるということです。日本史では、戦争というと第二次世界大戦をイメージしてしまいますけれども、実は第一次世界大戦のインパクトを考えずに20世紀という世紀を考えることはできないし、第二次世界大戦そのものも考えることができないという立場に立っております。

そればかりでなく、今、私たちが生きている時代のいろいろなシステムなり、考え方なり、文化なり、そういったものはすべてと言うと少し語弊がありますが、第一次世界大戦のかなり大きな衝撃が私たちの世界を形作っている部分があるのではないかという仮説が立てられます。これが2点目となります。

それから3点目が、今日の比較研究というテーマに関わりますが、非ヨーロッパ圏を視野に入れること。日本で第一次大戦を研究するという、それ自体が非常に珍しいことだと思うのですが、実際日本は交戦国、参戦国の中に入っておりますし、そればかりでなく、ヨーロッパの大戦が対岸の火事ではないほど、社会に大きなインパクトを与えていたということです。それだけではなく、第一次大戦はもっと地球規模の影響を与えていたのではないか、それはもちろんラテンアメリカやアフリカなどのさまざまな地域や植民地も含めて考えなくては行けない。つまり、従来のヨーロッパ中心の大戦観を、あえて日本から見直してみようという意気込みを、私たちは常に抱きながらやりたいと思っております。

4点目に、戦争というものを考えるに当たって、今まで政治史や外交史がリードしてきたのですが、そればかりではなく、文化や精神のことを考えたいと思っております。班長の1人の岡田さんは音楽史の研究者ですが、小説とか音楽、芸術、美術も重視するし、それだけではなくて、人々の感性がどのように変わってきたのかということを考えたい。以上が、私たちのマニフェストのようなものです。

アングルですが、大きく分けて3つの言葉で表しております。1つは世界性です。第一次世界大戦の世界性というものを、先ほど言いましたようにヨーロッパ中心ではなくて、やはり地球規模の問題としてとらえたい。ヨーロッパ戦争、欧州戦争と当時日本では言われたときがありましたが、やはり西部戦線での独仏の戦いであり、東部戦線での独露の戦いであるという、つまりヨーロッパ大陸の戦争としてとらえられがちだったものを、戦場・非戦場を超えて、第一次大戦の影響を考えたいということになります。現に私どもの研究会では66回の報告会を今までしてきましたが、そのうち20本がアジアを対象にしたもので、東南アジアから第一次大戦を見るというユニークなものもあります。

次に総体性ですが、これは今までやられてきたことと割合近いのですけれども、戦場だけではなくて、銃後の人々の感性や感覚の変化、あるいは知覚の変化といったものを聞きたい。市民、国家の動員という面からだけではなくて、市民の協力という局面を見ていきたいというものになります。

続いて3番目の継続性が少し難しいところなのですが、第一次大戦というものがいった

いつ終わったのかということ、きちんと聞きたいと考えています。基本的には1918年11月の休戦協定とか、1919年6月のヴェルサイユ条約とか、さまざまなポイントはあるのですが、しかし、地球規模で見たときには、各植民地の民族紛争であるとか戦火自体は、

第一次大戦の影響とロシア革命ももちろん重要ですが 消えていない。さらに戦後社会において第一次大戦の武装解除がなされた後も、社会では武装は解除されていない。とりわけドイツにおいてはローザ・ルクセンブルクらの革命に見られるように、そのまま国内での戦争へと結び付いていく。それだけではなくて、ドイツだと、例えば1923年にルール地方が、フランス、ベルギー両国によって賠償金未払いという理由で占領されますが、それもやはり第一次大戦の余波と考えると、なかなかいつ終わったということが言えない。そういう意味でも、やはり継続性という問題をとらえずには大戦は見られないだろう、というアングルから考えております。

これまでの中間成果報告といたしまして、人文書院から「第一次世界大戦を考える」というレクチャーシリーズの本が今、出続けているところです。山室さんのご著書、『複合戦争と総力戦の断層：日本にとっての第一次世界大戦』もありますし、美術（河本真理『葛藤する形態：第一次世界大戦と美術』）とか音楽（岡田暁生『「クラシック音楽はいつ終わったのか」：音楽史における第一次世界大戦の前後』）とかがあるのが、少し変わっているというか、不思議なところだと思います。

それから早瀬晋三さん。人文研では、どんなに目上の偉い先生でも「さん」と呼ばないとだめですと指導されていて、ある意味での若輩者へのプレッシャーのようなものがあるのですが、取りあえず「さん」と呼ばせていただきます。早瀬さんは、東南アジア史から見て国民国家形成の過程がどうあるのかが重要だろうという本、『マンダラ国家から国民国家へ：東南アジア史のなかの第一次世界大戦』をお書きになっています。そのほか、捕虜から見たら総力戦とはどうなのだろう（大津留厚『捕虜が働くとき：第一次世界大戦・総力戦の狭間で』）、女性から見たらどうなのだろう（林田敏子『戦う女、戦えない女：第一次世界大戦期のジェンダーとセクシャリティ』）、といった本も出ています。イギリスでしたら実際に戦争の後方、ほとんど前線に近いところで女性が活躍していたという事実もありました。

アメリカニズムという問題（中野耕太郎『戦争のつぼ：第一次世界大戦とアメリカニズム』）、これは後で触れます。それから中東欧の国境の引き直し（野村真理『隣人が敵国人になる日：第一次世界大戦と東中欧の諸民族』）は、いったいどうなるのかということも、もちろん問題になってきます。このシリーズ、今後続刊されていきます。

またPR活動ばかりで恐縮ですが、来年の1月12日、13日に京都大学で人文研が中心となってシンポジウムを開くことになっております。山室さん、それからホーン、ヒルシュフェルト、ベッケル、ヤンツ、ウィンターといった、そうそうたるヨーロッパの第一次世界大戦研究者を呼んで、ほぼ2014年のカレンダーの最初に位置付けられる国際シンポになっております。幸いなことに、まだ少し席に余裕がありますので、もし皆様の中でご関心

のある方は、人文研のホームページから入っていただければと思います。

さて、ここからは簡単に、大戦の比較研究というのはどういうアプローチが可能かということを書かせていただきたいと思います。そうなってくると、実は比較研究の楽しみというよりは苦しみというか、何てつらいんだ、何て難しいんだろうと、むしろ私のような人間には、高い壁の前に立っているような気分にならざるを得ない、そんなテーマです。

その例が統計ですけれども、比較研究の中で最も簡単ではないですが、一番分かりやすいアプローチというのは、やはり数字を使うことだと思います。第一次世界大戦に関しては、ものすごく大量の数字が出てきて、それを使って経済史を中心に、あるいは人口学などを中心に、たくさん本が出ております。たとえばチカリングという有名な研究者の本に付けられている表を見ますと、大戦というものを 1 つの角度から眺めることができると思います【表 1】。

	ドイツ	オーストリア・ハンガリー	中欧同盟国総計	フランス	ロシア	イギリス (本国のみ)	連合国総計	USA	連合国 + USA
人口 (百万)	66.9	52.1	119.0	39.7	175.1	44.4	259.2	97.3	356.5
鉄鋼生産量 (百万トン)	17.6	2.6	20.2	4.6	4.8	7.7	17.1	31.8	48.9
世界における工業生産高の割合 (%)	14.8	4.4	19.2	6.1	8.2	13.6	27.9	32.0	59.9

Roger Chickering, *Imperial Germany and the Great War, 1914-1918*, 2.ed., CUP, 2004, p.198

表 1

これは要するに、ドイツがその当時、鉄鋼の生産量を含め、経済的に地球社会の中で、どれだけのパーセンテージを占めていたのかを見いだせるということ。鉄鋼だけの話ではありますが、武器には鉄鋼が必要なのでみてみましょう。1914年の数字ですが、戦争が始まった時点で、フランス、ロシア、イギリスを足した生産量よりもドイツ 1 国が少し多いということが分かります。

もう 1 つ面白いのが、やはりアメリカの存在になります。アメリカは 1917 年 4 月によく参戦をしますが、経済力からすると圧倒的なものがあります。ただ、アメリカが参戦したのは、やはりかなり後になってからのことで、ウィルソンは、最初は参戦することを反対していましたので、同盟国と連合国は、経済力で比較したときには、開戦当初は拮抗していたと言えると思います。

では、やはりアメリカが加わったことで戦争の勝敗が決まったと、この統計だけを見ればそういう結論は言えると思いますが、実はそれだけではないのではないかという問題もあります。というのは、ドイツもちろん植民地を持っていましたし、イギリスの場合はインドという植民地がありました。それからイギリスの連邦の仲間として、もちろんオー

オーストラリアやカナダもあって、そういうことを統計に入れていかないと、比較が難しくな
 っていきます。ですから、統計を扱うときには、いろいろな前提を作らないと説明しにく
 い状況が生まれてきます。

あるいは、この表には、死者の数やどれだけ男性が動員されたかという数字も書かれて
 あります【表 2】。時間もないので飛ばしますが、例えば男性の動員のパーセンテージを見
 ますと、フランスが最も戦闘員として男性を動員することに成功しているという状況にな
 っていて、ドイツよりも多いというのは少し意外でした。

	United Kingdom ¹	France ²	Germany ³	Austria-Hungary ³	Russia (-1917) ⁴
Population, 1910-11 ⁵	40,460,000	39,192,000	64,296,000	51,356,000	160,700,000
Male population, 1910-11 ⁵	19,638,000	19,254,000	32,040,000	25,374,000	78,790,000
Men mobilized	6,211,427	8,660,000 ⁶	13,250,000	8,000,000	13,700,000
Percentage of male population mobilized	31.6	45.0	41.4	31.5	17.4
Military casualties	2,437,964	3,100,000	6,193,058	6,400,000	5,409,000
Dead	744,702	1,400,000	2,044,900	1,100,000	1,660,000
Wounded	1,693,262	1,700,000	4,148,158	5,300,000	3,749,000
Casualties per 1,000 prewar male population	124	161	193	252	69
Civilian deaths due to war ⁷	292,000	500,000	624,000	2,320,000	5,050,000
Birth deficits ⁸	1,788,000	3,074,000	5,436,000	5,063,000	26,000,000 ⁹
Monetary costs					内戦・革命期を含む
Direct	\$44,029,011,868	\$25,812,782,800	\$40,150,000,000	\$20,622,960,600	\$24,383,950,000
Cost per head	\$1,088	\$659	\$624	\$402	\$152
Loss of life: capitalized value ¹⁰	\$3,083,066,280	\$4,060,000,000	\$6,911,762,000	\$2,992,000,000	\$3,353,500,000
Property losses	\$1,750,000,000	\$10,000,000,000	\$1,750,000,000		\$1,250,000,000

↑戦場になったフランス

Roger Chickering, *Imperial Germany and the Great War, 1914-1918*, 2.ed., CUP, 2004, p.192.

表 2

お金の損失でいきますと、やはりイギリスが一番多くてフランスは少ない。ただ、フラン
 スはその中でも戦場になりましたので、フランスの財産がかなり失われているというこ
 とがあります。このように、いろいろな数字からまだまだたくさんのが言えるのです
 が、ぱっと並べるだけでもいろいろなことを考えることができます。

ただ、大きな問題がありまして、戦争で死んだ人と、その後に起こった革命で死んだ人
 というのが、まず分けられない。もう 1 つ言いますと、先ほどのグラフで文民、つまり非
 戦闘員の死者の数が出ていましたが、これも非常にあいまいな数字で、当時スペイン風邪
 が地球規模ではやりましたが、スペイン風邪で死んだ人を、戦争中の栄養失調の影響で死
 んだ人と切り離すことはなかなかできないんですね。そういうことを考えますと、実は死
 者の数というのも、かなり限定した形でしか私たちは把握することができない状況で、今、
 ヨーロッパの大戦研究では死者の数だけで論文が書けるぐらい、定まってない問題です。

もっと言いますと、大戦というのはいったいつからいつまでなのか。確かに 1914 年の
 7月に始まるということは、ヨーロッパ戦争だけを見れば言えますけれども、それまでです
 でバルカン戦争というのがありまして、それを入れないと、やはり大戦論を考えられな

いのではないか。また、先ほど言いましたように終わり方ということを考えて、戦争が終わった後のルール占領までの1923年までを含めなければいけないのだろうか。統計を厳密にしようとすればするほど、どんどん袋小路に入ってしまう、まさに比較研究が苦しいものになっていくということもあります。今、数値計算はかなり精緻になり、発展していることは間違いないのですけれども、私どもは非常に悩んでいるところです。

そこで、少し違った比較試験をして、比較というよりも、むしろ文化の連なりというか、連鎖というか、そういったものから大戦を見ると、もっと違った比較ができるのではないかと思います。

1つは文学史的課題です。実は今朝、山室さんと北海道文学館に行って、ちらっと見てきたのですが、そこに『クラルテ』という雑誌が置いてありました。『クラルテ』というのは何かといいますと、フランスの作家のアンリ・バルビュスという人が始めた反戦運動のことです。光という意味ですが、このクラルテ運動を指導したバルビュスは、『砲火』という日本語にも訳された小説などを書いていて、これは当時の兵隊の俗語（スラング）を使いながら、すごくリアルに描かれた小説で、大変売れたというか、いろいろな人に読まれた小説です。彼自身は、戦争というものは結局、資本主義がもたらすものであるという視点から、反資本主義に結び付けて反戦運動を行っています。これを世界各地の知識人に連帯を呼び掛けてやっておりまして、その1つが今日博物館にあった『クラルテ』という雑誌に行き当たるわけです。

それはいったいどういうことかといいますと、非常に有名な『種蒔く人』という雑誌が1921年2月25日に秋田県の土崎港町で発刊されますが、これを発刊した小牧近江という人物が、実は大戦中にお父さんに連れられてフランスに留学していました。お父さんは、近江谷栄次といって秋田の有力者です。小牧近江は、そこでクラルテ運動のバルビュスと出会いまして、そこでクラルテの精神、クラルテ運動に加わっていきます。日本に戻った小牧近江が、まさにそのクラルテの精神の種を日本に蒔くということで『種蒔く人』を発刊したということになります。

それ以外に小牧近江は、そのバルビュスの本や思想などを紹介したり、訳したりしておりまして、『クラルテ』という雑誌を今日見て初めて知ったのですけれども、秋田出身の、北海道小樽で活躍した小林多喜二が、この『クラルテ』を編集していました。このようにプロレタリア文学の人々に、『種蒔く人』の影響が広がっていきます。

有名な作家でいくと、金子洋文とか葉山嘉樹などがこれに加わりながら、プロレタリア文学の一翼を担っていくわけですが、私が今興味があるのは、伊藤永之介という秋田の作家です。彼は農民作家ですが、「万宝山」という中国東北部における中国官憲と朝鮮人農民の激突を描いた小説を書くのみならず、第一次世界大戦後の恐慌で日本経済がどんなにひどいことになってきたのかということを描いて、銀行の小説を書いたりします。あと警察の小説なども書いていて結構面白いのですが、こういった地方出身の作家に至るまで、その大戦の影響が色濃く見られるということが分かります。

また、武者小路実篤の『或る青年の夢』という小説も大戦を描いた小説で、これを魯迅が1921年に中国語に翻訳しています。文学という視点から見ると、さまざまな問題が分かってくる。

ドイツの有名な『西部戦線異状なし』という映画にもなったレマルクの小説は、平和主義なのでナチス時代に焚書の憂き目に遭いますが、これを翻訳した人は秦豊吉さんといって、後に帝劇の社長になるような人でした。

いろいろな方が、大戦の小説に関わってくるのですが、とりわけ重要なのはナチスになります。ユンガーの『鋼鉄の嵐の中で』については飛ばしますが、1939年に石中象治さんというドイツ文学者が『ドイツ戦争文学』という本をお書きになっております。これは、要は第一次世界大戦期のドイツの戦争文学というものを紹介した本ですが、1939年9月、ヒトラーがポーランドに侵攻した月に出ていて、まさに第一次大戦期の文学というものを、今、ナチスと同盟を結んでいる日本の我々がしっかり読むべきだと。これはなぜかという、戦争に日本は突入していたわけですけども、兵士の感覚というものは洋の東西を問わず一致しており、そういった感覚は、戦争文学を読むことによって分かる。そういう意味で文学の翻訳は重要になっていきます。

幸いにも、人文研の前身の1つが、かつての独逸文学研究所だったものですから、ナチ文学と一緒に、ナチがたたえた第一次大戦の文学のドイツ語の原語と翻訳がたくさんありますので、私も大変助かっているのですが、そういう視点も考えることができる。つまり統計もすごく重要ですけども、精神的な比較研究も、この研究班でかなり重視されていると思います。それは美術にも演劇にも当然関わってくることです。

さて、最後に、私の専門に近いということで、食糧の問題から比較研究というものを考えてみたいと思います。当時、世界第2位の工業国だったドイツで、ドイツの健康庁の統計によると76万人の餓死者が生まれたという悲劇がありました。私は、それがどうしてだったのか、どうしてそういうことになってしまったのかということを考えました。

その一番大きな原因は、世界に冠たるイギリスの海軍力を使った海上封鎖にあったわけですね。アメリカ大陸からの食糧、それから強調したいのは家畜の餌です。飼料をドイツに輸入させないようにした。それが大きな原因の1つなのですが、その影響について確認してみたいと思います。

この写真は当時ドイツで撮られた買いだめをする子供たちの写真です【図1】。フード・ウォーというのは、今では歴史用語になりまして、第一次大戦研究者の間で使われますが、実は食糧なしには大戦を見られなくなっているのではないかと、という思いが最近強くなっています。ドイツでもこのように銃後がかなり荒れてきている。子供たちも、これは非合法なのですが、村と都市の境目まで行って、そこで食糧を農民たちから、国家が定めた値段よりも高い値段で買ってきて、自分の家に持って帰る、というところをカシャッと撮った写真です。



図 1



図 2

次は変な絵ですけれども、当時のカリカチュアです【図 2】。ハムスターの少し太ったお父さんと、その奥さんと子供たちが描かれているのですが、「ハムステルン」というドイツ語が当時はやるんですね。「ハムスターをする」と訳してもいいと思うのですが、何なのかといいますと、ドイツで買いだめが盛んになってきます。つまり、これはいろいろな意味があるのですが、都市で少しお金を持っている人が、戦争で食糧の値段が上がる前に、いっぱい買い占めてしまう。さらに商魂たくましい人は、それを食糧の値段が上がったときに売ってしまう。そういうことを、「あいつらはハムスターだ」と言って批判するわけで、その絵がこの

ように描かれています。

その次はまさにグリム童話の『ヘンゼルとグレーテル』のカリカチュアです【図 3】。当時ドイツでは K パンといって、K はジャガイモ（カルトフェルン）の K ですけれども、ジャガイモを混入した少し粗悪なパンを配給するようになっていたわけです。つまり小麦やライ麦が足りなくなってきた。その K パンというのが当時民衆の間で記憶として刻まれるのですが、K パンが非常にまずかった、そのまずさを表したカリカチュアです。『ヘンゼル

とグレーテル』のお話をご存じの通り、ヘンゼルが継母とお父さんに連れられて山に入って、そこに捨てられるけれども、ヘンゼルはそれをあらかじめ知っていて、山に行く途中に光る石をぼとぼとと落としていく。結局その月夜に光る石を頼りに、家に帰って来られたという話ですが、この場合はヘンゼルが K パンを落としているわけですね。K パンを落とすと、鳥が食べないので何とか家に帰れました、めでたしめでたしというカリカチュアになっております。

それからこれは、ケーテ・コルヴィッツというドイツの有名な共産党の画家が描いた国際的にインパクトを与えた絵で、要はこの食糧戦争の最大の犠牲者は子供だったということが言えます【図 4】。



図 4

ドイツはそのまま食糧生産量が下がるのですが、フランスはカナダとアメリカから食糧の輸入ができたわけです。多少の配給制を導入しましたが、むしろフランスの場合はドイツと違って、食糧消費量は大战中増えていきます。これはつまり、輸入ができたから、海上封鎖をされなかったからという比較ができます。

イギリスも、食糧管理局などを作って配給制も引きましたが、やはり餓死者や闇市は出ていません。これは先ほど言いましたように、カナダやオーストラリアとの密接な関係があったからということになります。ただ、やはりこの当時、食糧を管理する配給制をしな



図 3

比較史になりますが、ドイツはこのように非常にひどかったのですけれども、当然、同盟国のオーストリア・ハンガリー二重帝国も配給制を引き、かなり飢餓が進んでいたといわれています。オスマン帝国も万単位の餓死者が出ていた。これは食糧の生産が落ちたというよりは、むしろ鉄道の整備が軍事との競争になってしまって、結局行き渡らなかった、アクセスが問題になって餓死があったということが言われています。アルメニア人虐殺のことは飛ばします。

フランスについては、ここが重要ですが、戦争が始まってすぐは、国内食糧生産量がぐんと落ちます。これはどこの国もそうですが、とりわけ短期戦で終わると思っていた国は、農民をどんどん徴兵に回してしまいましたので、生産量は下がります。しかしながら、

ければいけないということで食糧管理局がつくられ、これは後に食糧省になっていきます。

ロシアは一番ひどかったのですけれども、政府が軍隊の食糧を確保するためにかなり大量に買い込んで、食糧価格が高騰して急激な飢餓になってしまった。配給制は遅れ、革命の重要な要因になってしまいます。

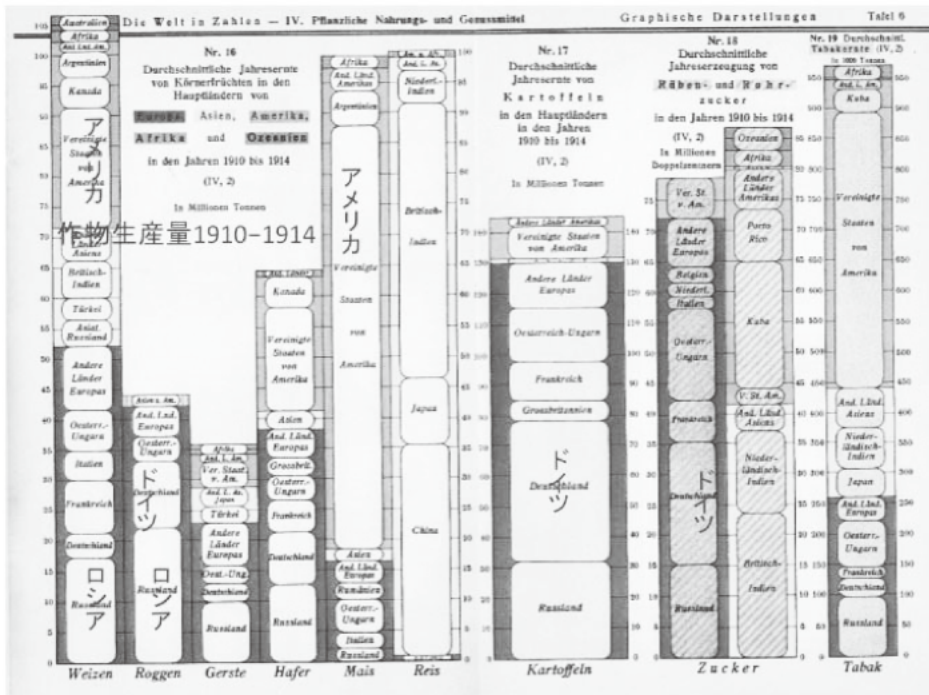
遅れて参戦したアメリカは全然食糧に困ってなかったかといいますと、確かに困ってなかったのですが、面白いことに食糧保存運動という動員運動を繰り広げます。これは戦時広報委員会といって、アメリカの当時のプロパガンダを果たした委員会が中心となって、ハルハウスを造った人で有名なジェーン・アダムズなども巻き込みながら、主婦は食糧をできるだけ腐らせないように保存をしっかりしましょうという運動をしていきます。ただ、もちろん餓死はありませんでした。

イタリア、ベルギーは飛ばしますが、日本もまたシベリア出兵に起因する米騒動によって、かなり食糧問題が危機的なものと、政府当局によって捉えられます。ドイツの飢餓に関してもタイムリーに日本に伝わって、外務省の経済局などが訳してドイツの状況を紹介していたりします。こういった中で、農業経済学者や農林官僚などが帝国内食糧自給というものを唱え、それが北海道や台湾、朝鮮を巻き込んだ米の帝国増産運動へとつながっていくということにもなっていきます。

簡単にまとめますと、まさにこういう大戦が投げかけた問題で、かなりの君主国が倒れました。ドイツもホーエンツォレルン家が倒れましたけど、まさに政治の根本である国民の生命を確保することができなくなったということが、政治信用に危機をもたらした。そのときに、やはり食糧というのは大きなメルクマールになったと言えますし、それから戦勝国のイギリスも含めて、大戦後に農林省あるいは農水省が誕生して、食糧分野への政治介入が盛んになっていきます。闇市とナチスの「飢餓政策」の問題は飛ばしますが、このように食糧というものも武器としてとらえるべきだという考え方が、大戦において芽生えてきたと言えます。

これは最後おまけですけれども、1914年の段階における世界各地の食糧生産のパーセンテージです【図5】。全部見ていくと大変ですけれども、トウモロコシのところアメリカがほとんどを占めていることが分かります。それから右側から2番目、ツッカー（砂糖）のところですが、右側の柱がサトウキビ由来の砂糖で、左側がテンサイ、いわゆるサトウカブ由来の砂糖ですけれども、ドイツとキューバが非常に目立っています。それからイギリス領インドも目立っています。

要は、第一次世界大戦によってヨーロッパの食糧事情が沈没していく中で、アメリカがその食糧を通じて存在感を見せていくということが出来ます。このトウモロコシというのは、20世紀という大きな枠組みでいきますと、食糧のみならず、飼料や、今ではブドウ糖果糖液糖という形で糖分としても使われている。トウモロコシ帝国と私が勝手に付けたのですが、そういう状況になってきた。食を通じてアメリカニズムがかなり世界に影響を与えるようになっていました。



小麦 ライ麦 大麦 燕麦 玉蜀黍 米 ジャガイモ 砂糖(甜菜・砂糖黍) タバコ

図 5

それからもう 1 つは、カリブの問題です。砂糖はアメリカ国内であり取れなかったのですが、キューバとかカリブ諸国の砂糖が重要なのです。アメリカが参戦する過程で、カリブに関しては、かなり暴力を含んだ帝国主義を敷いていました。それにはいろいろ理由があるのですが、その 1 つは、やはり砂糖だった。サトウキビだったわけです。

このアメリカ帝国主義をいわばオブラートで包むということと、ウィルソンの民主的な世界平和を求めるといふ動き、いわば帝国主義と民主主義が連動しながらアメリカの存在感が増えていく、そこに食糧という問題も、食糧だけではもちろんないですが、関わってくるのではないかと、今私は仮説を立てているところです。

以上のように第一次大戦というのは、まだまだいろいろな課題が降ってわいてきている状況で、とても比較研究が楽しいというところまで行かず、まだ苦しい状況が続きますけれども、今後とも頑張っていきたいと思いますので、ぜひホームページなどで閲覧していただければと思っています。どうぞご清聴ありがとうございました。

○宇山智彦 藤原先生、どうもありがとうございました。実は私も第一次世界大戦を含む時期の中央アジア史の勉強をしていますけれども、この時期は本当にそれまでの国や地域

の事情の違いにかかわらず、さまざまな共通の解決すべき課題、動員や組織化の課題を世界的に共有するようになる。そして民族運動などにしても、運動の手法を相互にそれまで以上に参照するようになる。私の研究仲間のロシア史研究者の池田嘉郎さんは、強制的同期化という言葉を使っていますが、世界が一つになるというのは、世界史上のいくつかの時期について言えることですが、その中でも非常に重要な時期です。本当に課題の共有ということを前提として、さまざまな地域の比較をするのに適した時代で、その中でも大変重要な問題である食に焦点を当ててお話をいただけたかと思います。

ご報告についての質問は、基本的には後でまとめてお受けしようと思いますけれども、もし何かどうしても今個別に藤原先生にご質問をしたいという方がいれば、1つぐらいお受けしようと思いますがいかがでしょうか、よろしいですか。